

ワークショップ「哲学的自然主義のメタ哲学的評価」

趣旨説明

戸田山和久は、近著『哲学入門』（筑摩書房、2015年）で、『『ありそでなさそでやっぱりあるもの』こそ、哲学がずっと考えてきた中心主題』（p.11）であると述べ、同書の目的は「何とかして、存在もどきたちをモノだけ世界観に描き込むこと」（p.19）であるとしている。ここに見られるのは、自然主義の追求こそが現代哲学の中心課題の一つだという哲学観である。

これに対して門脇俊介は、『現代哲学』（産業図書、1996年）の序において、「哲学的な思考の試みは、こうした反自然主義とともに始まる。プラトン以降の西洋の哲学の歴史（の主立った正統な部分）は、自然主義への反発や恐怖を背景とした、自然主義との対決の歴史とみることもできる。」（p.4）と述べている。

対照的なこれら二つの哲学観のどちらが適切であるにせよ、ここからは、現代において哲学とどのような営みかを考えるうえで、自然主義が重要な役割を果たすことがわかる。

しかし、自然主義と呼ばれる立場の内実はけっして明らかではない。たとえば、Stanford Encyclopedia of Philosophy の「自然主義」という項目の冒頭で、デイヴィッド・パピノウは、『『自然主義』という語は現代哲学においては厳密な意味を持たない』と述べ、この語の公式理解を定める試みは無益だと述べている。

実際、哲学的自然主義の内実に関しては、以下のような点に関して論争が繰り広げられている。

- ・ 認識論的自然主義と存在論的自然主義はどのような関係にあるか
- ・ 認識論的自然主義は経験主義や科学主義とどう異なるか
- ・ (存在論的) 自然主義者は物理主義者でもあるべきか
- ・ 物理主義的でない自然主義にはどのような選択肢があるか

さらに、自然主義を軸として哲学の営みを特徴づけるという観点からは、以下のような問いも生じる。

- ・ 自然主義を支持するかどうかは哲学的な好みの問題か、あるいはより実質的な根拠にもとづく選択か
- ・ 自然主義を支持するならば、どのような哲学的見解と対立することになるのか
- ・ 自然主義と反自然主義は、共通の問題に関して相対立する立場をとっているのか、それとも、まったく異なる哲学的営みに従事しているのか

- ・自然主義の下でも、哲学に経験科学と異なる固有の役割を認めることは可能か

本ワークショップでは、自然主義に対してそれぞれ異なるスタンスを取る 3 名による提題を手がかりとして、自然主義の諸形態の内実やその関係を明らかにし、自然主義的あるいは反自然主義的に哲学を行うということが何を意味するのかを明らかにすることを目指す。

「哲学的自然主義は何を排除するのか： Why naturalize 問題を糸口にして」(仮)

井頭昌彦 (一橋大学)

メタ哲学的立場としての哲学的自然主義は、哲学的知見の身分を特徴づけ哲学研究のあり方をガイドする機能を持つ。逆に言えば、哲学的自然主義を採用することは、幾つかの哲学的営みを排除することになるだろう。そして、そのような排除主張の是非を巡って自然主義 vs. 反自然主義の戦いは展開される。

だが、正確なところ、哲学的自然主義が排除する哲学的営みとはどのようなものなのだろうか。この点を明確にするためには、哲学的自然主義の正確な内容、あるいは少なくとも中核的内容を抽出するのが有効だろう。というのも、これが抽出できれば、哲学的自然主義によって排除されるものを《その(中核的)内容と折り合わないもの》として同定できるからである。たとえば、もし自然主義がしばしば言われるように物理主義や科学主義と同一であるならば、あるいはこれらを含意しているのであれば、物理主義や科学主義と折り合わない立場は自然主義そのものによって排除されることになるだろう(実際そのような理解をしている論者は現在でも一定数いるように思われる)。

ところが、哲学的自然主義の内容規定を巡っては、90年代にパピノウが指摘した「コンセンサスが存在しない」(Papineau 1993)という状況がいまだに続いており、ここ10年ほどの動向を追っても内容規定は極めて拡散している。このような状況を生んでいる要因の一つは、内容規定を提示する際に「なぜそのように規定すべきか」についての根拠説明がほとんどなされていないことにある。つまり、相異なる諸規定間での優劣評価をするための材料が決定的に欠けているのだ。実際、*The Blackwell Companion to Philosophical Naturalism* (2016)や *The Oxford Handbook of Philosophical Methodology* (2016)といったまとまった論集においても、規定の羅列があるだけで根拠説明は与えられていないことがほとんどである([戸田山 2003]は数少ない例外の一つであり本発表でも批判的に取り上げる)。その結果として、様々に規定される「自然主義」的諸立場がどのように関係しているか、なぜそれらが同じく「自然主義」とカテゴライズされるかについての、見通しのよい描像が描かれることもほとんどない、という状態が続いている。

以上の状況を踏まえ、本発表では思想史分野の方法論も参考にしながら、自然主義の中核的要素の抽出を試みる。その上で、自然主義という立場が何を排除するかを明らかにする。具体的な主張内容は以下の通りである。

- (1) 思想史的観点から自然主義の内容を同定する場合、《起源》を重視するにせよ《普及形態》を重視するにせよ、科学主義や物理主義を自然主義の不可欠の要素とみなすことはできない。

- (2) 自然主義のコアは第一哲学の放棄と体系内在主義という方法論的テーゼである。物理主義や科学主義はそれに付与可能なオプションと位置づけられるが、他方で自然主義をとることで可能になっている立場でもある。
- (3) この構図であれば、多様な自然主義的諸立場を統一的な描像の元に位置づけることができる。例えば、「存在論的自然主義」の諸形態は体系内在主義という方法論的テーゼを背景にすることで説得性を確保しうる。
- (4) 自然主義が排除するのは、ある種の形而上学的实在論など、科学を超えた妥当性主張を展開する諸立場ぐらいしかない。
- (5) 自然主義をめぐる議論は **Why naturalize?**よりも **How naturalize?**の問いに焦点化していくべきである。

「自然主義者が物理主義者となるべき理由」

鈴木貴之（南山大学）

現代の分析哲学においては、多くの研究者が自然主義者を自認している。しかし、そこで自然主義として想定されているものは、たんに基礎づけ主義を否定するだけの立場から、自然科学に登場する存在者だけを実在と見なすような科学主義的な立場まで、さまざまである。では、これらさまざまな立場はどのような関係にあるのだろうか。また、自然主義者がある特定の立場を支持すべき理由はあるだろうか。本発表の目的は、①広義の自然主義に含まれるいくつかの考え方を整理し、②そのなかに物理主義を位置づけ、擁護し、③物理主義を支持することの哲学的含意を明らかにすることである。

自然主義の出発点となるのは基礎づけ主義の失敗だと考えられる。デカルトや論理実証主義の試みを振り返れば明らかなように、知識の体系をもっとも確実な知識によって基礎付ける試みは失敗に終わってきた。世界に関する知識の探求は、すでにわれわれが持っている知識体系を出発点として、経験に照らしてその体系に修正を加えていくという形で進めるほかないのである。このように、自然主義者が最大公約数的に共有しているのは、基礎づけ主義の放棄とそれにとともなう体系内在主義の採用、すなわち、弱い方法論的自然主義だと考えられる。

しかし、弱い方法論的自然主義はさまざまな哲学的立場と両立可能である。たとえば、人間の心について、体系内在主義のもとで探究を進めるとしても、物的一元論をとることも、心身二元論をとることも可能である。

ここで、自然科学的知識の体系性に注目することによって、物理主義が自然主義者にとって魅力的な選択肢となる。物理学、化学、生物学といった自然諸科学は、たんにそれぞれの対象領域に関する自然法則を明らかにするだけでなく、全体として一つの知識の体系を構成している。たとえば、化学の研究対象であるさまざまな原子や分子は、物理学の研究対象である電子や陽子から構成されている。また、生物学の研究対象である遺伝子について考えてみると、ある生物においてはある化学物質がその役割を果たし、別の生物においては別の化学物質がその役割を果たしている。生物学が扱う存在者は、化学が扱う存在者によって実現されているのである。これらの説明を与えることで、自然諸科学の探究の対象は、ある意味で同じ一つの世界だと考えることができるのである。

体系内在主義をとる自然主義者が、知識の体系を改良していくうえで単純性や統一性を重んじるとすれば、他の領域においても同様の仕方で異なる領域の知識を関係づけることができる。心や善や美といったものも、遺伝子やコンピュータと同様の仕方で自然科学的な世界のなかに位置づけることができるはずなのである。このようなリサーチ・プロ

グラムを掲げるのが物理主義である。

弱い認識論的自然主義に加えて、存在論的に物理主義を支持する自然主義者は、人間の心についても一定の見方を受け入れることになる。心の働きは脳の働きにほかならず、人間の知識の源泉は感覚器官および認知能力にかぎられる、といった見方である。そして、このような見方をするならば、自然科学的な見方において人間が持つとは認められない能力を用いて探究をすることは認められないことになる。このことは、哲学という知的探究にとっても、重大な意味を持つかもしれない。ここで排除されるものには、第六感のようなものだけでなく、倫理学における直観主義者が想定する直観のようなものも含まれるからである。物理主義を受け入れれば、哲学的探究を自然科学とは別種の探究手法を用いた自然科学とは別種の知的営みと考えることは困難になる。物理主義者は、伝統的な哲学の営みの一部（大部分？）を放棄せざるをえないかもしれないのである。

では、物理主義を受け入れない選択肢はどうだろうか。現在の反自然主義者の多くは、体系内在主義は受け入れるだろう。そうだとすれば、自然主義者と反自然主義者の争点は、体系内在主義の下で存在論にどの程度強い制約を課すべきかという点にあることになる。物理主義者が強い制約を課す動機としては、知識の体系の単純性や統一性を重視することや、自然科学という領域で大きな成功を収めてきたリサーチ・プログラムがさらなる成功を収めることへの期待がある。これに対して、反自然主義者は、第一に、物理主義というリサーチ・プログラムを採用すべきでない積極的な理由を提示する必要があり、第二に、自然科学の探究手法が適用不可能な場面では、どのような探究手法が用いられるべきであり、どのような存在論がとられるべきであるかを具体的に示す必要がある。これらの点で具体的な対案が提示されなければ、物理主義は、自然主義者にとって真剣な検討に値する唯一の選択肢だということになるだろう。

ここで、自然主義者はある種のメタ哲学的なジレンマに直面しているのかもしれない。一方で、物理主義は十分な動機と実質を備えているが、哲学にとって自己否定的な帰結をもたらす。他方で、反自然主義は哲学に独自の役割を保証するように思われるが、十分な動機と実質を備えていないように思われるのである。

「反自然主義とは何か？—その動機と課題—（仮）」

金杉武司（國學院大學）

反自然主義とは何か。この問いは「自然主義とは何か」という問いと表裏一体のものであるが、D・パピノーが言う通り(Papineau[2015])、「自然主義」という語は非常に多義的に用いられており、その統一的な定義を示すことは難しい。そこで本提題ではまず、自然主義と反自然主義をそれぞれ、一つの方向性を持つベクトルの中に位置づけられるさまざまな立場の総称として捉えることを試みる。そして、それぞれの方向性を動機づけているものが何であるか、またその動機の違いが、哲学的営みとしての自然主義と反自然主義をどのように異なるものとしているのかについて論じる。さらに、反自然主義が自然主義に対抗していくためにはどのような課題に取り組まなければならないかについても考察したい。

冒頭で示したように、自然主義の定義を示すことは難しい。しかし、その基本姿勢は大雑把に「超自然的なものごとを認めず、あらゆるものごとが自然のうちに位置づけられるとする考え方」と表現することはできるだろう。問題は、「自然」や「...のうちに位置づける」が何を意味するかである。これらをどれくらい強い意味で捉えるかによって、さまざまな自然主義が現れ、強い意味で捉えれば捉えるほど、それに対する反自然主義の反動も強いものとなると考えられる。また、上の「ものごと」として存在を主題とするか、認識（ないし認識の方法）を主題にするかによって、自然主義は「存在論的自然主義」と「認識論的（方法論的）自然主義」という二つに分けられる。それゆえ、本提題では、二つの文脈に分けて、それぞれの自然主義を特徴づける方向性について考えていきたい。

存在論的自然主義の主張は大雑把には「あらゆる存在者は自然界を構成する存在者、あるいはそうした存在者に存在論的に基づけられる存在者に限られる」と表現できるだろう。問題は、「自然界を構成する存在者」として何を認め、「そうした存在者に存在論的に基づけられる」ということで何を意味するかである。「自然界を構成する存在者」を最も限定的に捉え、物理学が指定する存在者のみとするのが物理主義である。そして物理主義は、問題の存在論的基づけを、それらの存在者への還元可能性（もしくは付随関係）として捉える。物理主義は最も厳格な自然主義であると言える。これに対して、自然科学の多様性を認め、物理学以外の個別自然科学の物理学への還元可能性を否定する論者たちは、「自然界を構成する存在者」として、物理学が指定する存在者だけでなく他の個別自然科学が指定する存在者をも認める。このようないわば「自然科学主義」もまたしばしば「自然主義」と呼ばれる。さらには、自然科学と人文社会科学との違いを強調し、人文社会科学が指定する存在者の実在性を主張する論者たちや、「自然の論理空間」と対比される「理由の論理空間」の独自性を強調し、後者の実在性を主張する論者たちまでもが、

自らを「(広い意味での) 自然主義者」と呼ぶことがある(McDowell[1994])。

このように、存在論的自然主義に分類される考え方は多岐にわたる。しかし、このように「自然界を構成する存在者」の多様性を認め、その範囲を広げる立場であればあるほど、それを「自然主義」と認める論者の数は減り、それをむしろ「反自然主義」と呼ぶ傾向が強くなる。これは、存在論的自然主義を特徴づける方向性が一元化の方向性であり、逆に、存在論的反自然主義を特徴づける方向性が多元化の方向性であるということを示唆していると言えるだろう。本提題では、存在論的自然主義の本質はその一元論的傾向にあり、存在論的反自然主義の本質はその多元論的傾向にあると考える。

他方、認識論的自然主義は、経験的な科学に先立ってその基礎づけを与えるものとしての「第一哲学」への反動として 20 世紀に(再?) 登場した。それは当初、認識論的な規範の存在を否定し、すべての認識的探求を自然科学の一部とする非規範的な認識論的自然主義として提示されたが、徐々に、認識的な規範の存在を認めつつ、その探求をも自然科学の一部に位置づける(つまり、認識的規範を道具的規範として捉える) 規範的な認識論的自然主義が支持を集めていった。それは、第一哲学を否定するために、認識的な規範の存在を否定する必要はないと考えられるようになったからである。さらに現代では、自然科学だけでなく人文社会科学もまた経験的な認識的探求であること、さらには哲学までもが経験的な認識的探求であることを強調し、多様な認識的探求をそれらが経験的なものである限り認めるような認識論的自然主義も考えられている。このような認識論的自然主義は必ずしも、哲学的認識の独自性を否定するものではない。つまり、第一哲学を否定することは哲学の独自性を否定することと同じではないのである。これに対して、「認識論的反自然主義者」と呼ばれる(あるいは自称する) 論者たちは、認識論的自然主義の主張それ自体にアプリアリ性があると指摘するなどして、つねに哲学的認識のアプリアリ性を強調してきたと言ってよいだろう。これは、認識論的反自然主義を特徴づけるものがアプリアリ主義の方向性であり、逆に、認識論的自然主義を特徴づけるものが反アプリアリ主義の方向性であることを物語っているだろう。

以上のように特徴づけられた存在論的自然主義/反自然主義と認識論的自然主義/反自然主義はどのように関係するのだろうか。一見すると、両者は互いに他方を含意するように思われるかもしれない。たとえば、認識論的反自然主義者はしばしば規範的事実がアプリアリに認識されることを強調するが、そのような規範的事実は「自然界を構成する存在者」とは全く異なるものであると考えられ、自ずと存在論的反自然主義を採ることになるように思われる。しかし、以上で確認した、存在論的自然主義/反自然主義と認識論的自然主義/反自然主義の特徴づけが正しいとすれば、両者の間に含意関係を認めることはできないだろう。つまり、一元論的な存在論的自然主義を採りつつアプリアリ主義の認識論的反自然主義を採ることも、反アプリアリ主義

の認識論的自然主義を採りつつ多元論的な存在論的反自然主義を採ることも、論理的には可能だと考えられるのである。実際、論理実証主義のようなやり方で、存在論的自然主義の主張それ自体をアプリアリな主張として位置づけるならば、それは前者の例になるだろうし、哲学が経験的な探求であることを認めつつ、そのような哲学的立場の一つとして、多元論的な存在論的自然主義を採るならば、それは後者の例になるだろう。つまり、存在論的自然主義の言う「自然主義」と認識論的自然主義の言う「自然主義」は同じ表現であるにもかかわらず、それが表しているのは全く論理的に無関係なものなのである。

なお、提題者は反自然主義的志向の強い提題者として、本ワークショップに参加しているが、提題者が特に関心を持っているのは、後者の<認識論的には自然主義だが、存在論的には反自然主義>という立場である。さらに提題者は、多元論的な存在論的反自然主義として、(自然科学であれ人文社会科学であれ)科学的な実践において措定される存在者の実在性だけでなく、非科学的な実践(たとえば、行為の善悪や人の責任などについて語る倫理的・社会的実践や、さまざまなものごとの美しさについて語る美(学?)的实践など)において措定される存在者の実在性をも認める立場(「実践的実在論」とでも呼ぶべきか?)にコミットしたいと考えている。また、このような認識論的自然主義の立場に立つということは、哲学的存在論もまた一つの経験的仮説であるというメタ存在論にコミットするということであり、そのような哲学的理論の経験的検証は、哲学的直観と理論との間の擦り合わせ(反照的均衡)という形で行われると考えられるが、提題者はこの「理論」の中に、自然科学だけでなく人文社会科学の理論も、さらには先に挙げた非科学的な実践の土台を成す概念枠(存在者はこの概念枠において措定される)をも含めたいと考えている。本提題では、この考えについても触れたい。

さて、自然主義と反自然主義の方向性は、どのような哲学的動機によって支えられているのだろうか。まず、認識論的反自然主義のアプリアリ主義については、デカルト以来の近代哲学特有の基礎づけ主義的発想がその動機であり、現代哲学に携わるわれわれにとって、それは認識論的自然主義の反アプリアリ主義に対抗しうるだけの普遍性・必然性を持った動機ではない(認識論的自然主義の反アプリアリ主義は、そのようなアプリアリ主義に対する反動をその動機としているがゆえに、現代において支持を集めている)ように思われる。

それに対して、存在論的自然主義の一元論的傾向と存在論的反自然主義の多元論的傾向はそれぞれ、甲乙つけがたい拮抗する二つの哲学的動機に支えられているように思われる。一元論的傾向を支える動機とは、世界をより単純なもので説明しようとする発想であり、多元論的傾向を支える動機とは、世界をありのままに理解(記述・分析)しようとする発想である。前者の発想は、自然科学(その中でも特に物理学)の本質を成すような発想であり、その意味でもそれは、存在論的自然主義をまさに「自然主義」たらしめているものだと言えるだろう。それに対する後

者の発想は、自然科学（物理学）の営みを決して否定するものではない。しかしそれは、世界把握の適切な方法はそれだけではないとする余地を認める発想、つまり一元論的な見方を相対化しようとする発想である。提題者はこのどちらもが、哲学という営み（あるいは理性の働き）の本質を成すものであり、どちらか一方を選ぶべき自明な根拠を挙げることは難しいように思われる。では、この二つの哲学的営みのどちらに軍配が挙がるかを判定する方法はあるのだろうか。本提題では、この点についても触れたい。

最後に、存在論的反自然主義にはどのような課題があるかを見ることにしたい。というのも、存在論的反自然主義は、その動機に基づいてただ存在者の多元性を主張するだけでは、存在論的自然主義に対抗しうるだけのものにはならないように思われるからである。もちろん、存在論的反自然主義はまず、存在者の多元性を主張するために、存在論的自然主義が主張する還元可能性を否定する（あるいは、付随性だけでは一元化には不十分であることを示す）必要がある。さらに、多元的に捉えられるさまざまな存在者すべてを実在者たらしめるような統一的な実在性の捉え方を示す必要もあるだろう。しかし、課題はそれだけではない。われわれは一つの世界の中に生きているという、容易には否定しがたい直観を持っているだろう。では、その多元的に捉えられるさまざまな存在者はどのように一つの世界の中に位置づけられるのだろうか。あるいは、多元論的な存在論では、世界それ自身が多元的に捉えられるかもしれない。その場合には、上の問いは次の問いに置き換えられる。その多元的に捉えられるさまざまな世界を一つにまとめ上げることはできるのだろうか。このような問いに答えることも、存在論的反自然主義が取り組まなければならない課題だろう。「理由の論理空間」が世界からいかにして制約を受けうるのかを考察した J・マクダウェルの議論(McDowell[1994])は、まさにこの問いへの取り組みの一つとして理解できるだろう。戸田山和久は、このマクダウェルの取り組みを自然主義への一歩として位置づけている（戸田山[2003] 86 頁）が、提題者は、これは必ずしも自然主義への一歩にならないと考えている。また、多元的に捉えられるさまざまな世界をまとめ上げるために「一つの世界」を想定する必要はないとも考えられる。本提題では、N・グッドマンの議論(Goodman[1978])などに依拠しながら、そのような方向での回答の試みも示したいと思う。

参考文献

Goodman, N. [1978] *Ways of Worldmaking*, Indianapolis: Hackett.

McDowell, J. [1994] *Mind and World*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Papineau, D. [2015] Naturalism, in *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <http://plato.stanford.edu/entries/naturalism/>

戸田山和久 [2003] 哲学的自然主義の可能性, 『思想』 948 号.